青森生活８年 ── 私の知らなかった日本 ──

本　郷　　亮

都会から出たことのない人間が地方で８年も暮らせば、考え方に多少の迷いが生じるのも当然である。大阪人である私は、32才で弘前学院大学（青森県）に赴任するまで、大阪という色眼鏡で日本を見ていた。色々な面でそうだった。例えば日本の社会経済を語るとき、私の言う「日本」とは「拡大された大阪」のようなものに過ぎなかったし、日本文化を語るときもそうだった。都会のスタンダードをなんとなく全国共通の規範と見なし、それを真に疑うことはなかった。むろん各地の多様性は、「書物」で知っていたが、それは腹の底からの実感を伴うものではなかった。

戦後最長の好景気（「いざなぎ越え」）をもたらし、都会で圧倒的人気を誇った小泉純一郎首相も、青森県にとっては戦後最悪の首相だろう。青森人が小泉改革を褒めるのを、私は聞いたことがないし、青森のメディアが彼を好意的に論評することなど、ちょっと考えにくい。TPP についても、とても賛成論を唱えられるような雰囲気ではない。

青森には陸海空の三軍の基地が揃っており、私の子どもの通っていた幼稚園の向かいにも弘前駐屯地（陸自）があった。朝にはラッパが鳴り響く。そこでは毎年、実戦さながらの公開演習（実弾は使わない）を間近で見物できる。ヘリが飛んできたかと思えば、ロープを伝って迷彩服の隊員たちが空から次々と降りてくる。原っぱに伏せた隊員たちによる機関銃の掃射音。それから戦車砲の轟音。子どもたちは大喜びだ！演習後には、戦車の上に登って記念撮影。また市の大通りでは毎年、軍事パレードがおこなわれる。

弘前では自衛隊はかなり人気の就職先である。私は市内の酒場に行くときは、いつも店の主人に「最近どんな客が多いですか」と尋ねるようにしていたが、答えはきまって教員・公務員・軍人だ。これは一体何を意味するのか。

最後に次のことを強調しておきたい。私は青森人を批判しているのではない。むしろ迷っている。青森人から見れば、私の考えこそが「異質」だろう。津軽三味線や畑仕事など、学んだことも多い。今年、８年ぶりに母校関西学院大学に帰ってきたが、青森で暮らして、社会科学の研究者として一皮むけたことは、間違いない。

（経済学部准教授）